『古事記』の序文に太安万侶は「帝紀」「旧辞」「本辞」が諸家から贗(贋・もたら)されていたと記しています。(『古事記』大須賀福寿本。応安年間(1368~1375)写)

「深く古を探りたまひき。心の鏡はあきらけくして明

らかに先代を見(観)たまひき。是に天皇6代天武天皇(673~686)は詔なさつて、『朕聞く、

諸家の贗(贋)す所の「帝紀」及び「本辞」、既に正実に違ひ、多く虚偽を加えて

いる。今の時に当たり改めざれば、幾年も経ずにその旨は滅びる』(初の女帝の33代の推古天皇(592~628)の即位に関して、ラシテ改竄・隠蔽がおこなわれた。薄々にお気付き)

「舍人あり。姓は稗田、名は阿礼。年は是れ28。

人となり聡明。目に渡れば、口に誦(よ)む。耳に払(触れる)れば、心に勒(し

る)す。即ち、阿礼に勅語(みことのみこと)して「皇帝日繼及び先代旧辞」を誦み習

わしむ。然れども運(とき)は移り、世は異(変わり)て、いまだその事を

おこなえないでいる。38代天智天皇の皇女(43代元明天皇(707~715)の御意向。ラシテ改竄・隠蔽からの復元)

「これらの文章を見るよ、」漢字直訳モノか?「帝紀」及び「旧辞」「本辞」は、記されたものであるよ

うです。「ラシテの文章か?皇帝日繼及び先代旧辞」を「誦み習わしむ」とは、太安万侶には読みに

くいモノであったようです。ラシテの原文でしょうね。(元明天皇も女帝です。アマテルカ

ミは男性でおキサキさまが多くおいでになられていたこと、今更(どう)直すの?) 聡明な稗田阿

礼でも簡単にはゆかなかったようでした。

ラシテの現代研究が進んだからわかるのです。実情は、悲惨でした。「お崇め」

『古事記』で逆にもっとひどくなった。「お崇め」から「縄文哲学」復活へ!

います。

タマキネさんは、大宇宙の哲学的な理解を「もとあけ」として整理し、そして、「もとあけ」を宮中に祭祀なされること、世の中の全てを納得させること、なされたのでした。

つまり、大宇宙と、国家の中心である宮中とのリンクを、敢然として完遂なさいましたのでした。「こと」のまじり、些細な諍（いさか）い事は雨散霧消の経過を辿り、国家の根底の礎が強固に定まることになったのでした。

国家全体の利益のためには、自らの「タカミ」のクニの事を少し外してまでの、「ををわけ」(ヨフヤケ)、「」へのお気持ちや世の中の人々に大きな感動がインパクトとなりました。

タマキネさんは、「ひかこのきみ」と、呼ばれます。

宮中の「たかま(タカマ)」に祭祀した「母中〇や」(モ

「フトマニ(モトアケ)」の構造

大宇宙の中心
アモト or 〇△〇 (アウフ)

見えない、実体が無い「幽」の世界							
アイフヘモヲスシの8音韻で代表							
1	2	3	4	5	6	7	8
アイ	フ	ヘ	モ	ヲ	ス	シ	

見える、実質のある「顕」の世界															
ミソフカミ (16音韻×2音韻) で代表															
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ヤ	ハ	キ	チ	ヌ	ム	エ	ネ	コ	オ	ヨ	ソ	ノ	ツ	ク	ナ
マ	ラ	ニ	リ	ウ	ク	テ	セ	ケ	レ	ロ	ノ	ン	ル	サ	ワ

宇宙は「幽」(アウフ)と「顕」(アワウタ)の48音韻で構成される。
48 = 48 = 96

①「うらないとは「幽」から「顕」へ「今」から辿る未来予想。時間経過とともに顕在化していく。

②「うらなう」ことによって、予知した内容への対応策を立てることが出来る。リスクを回避できる。また、過去に起きたこと(成功や失敗)の原因も知ることも出来る。

- トアケ」は、『ホツマ日本の歴史物語』③)
- 1、アメミヲヤ (大宇宙の創造祖)
 - 2、モトモト (トホカミエヒタメ・方角の守)
 - 3、アナシ (アイフヘモヲスシ・言葉の守)
 - 4、ミソフカミ (物質全般)
- の、哲学的な世界の把握の構造です。

母中〇や は、円形表示の円陣図ではありません。奈良時代ごろの鳴鐘根さんか、吉備真備などが付加したものが円陣表記の、モトアケの図です。これは付加物です、インド風です。インド的なものは、漢字渡来以降です。このことが解ってきたので、『ホツマ日本の歴史物語3』のフトマニの真実を世に送りました。

タマキネさんは、その基礎の世界把握を根底として、世の繁栄を祈念するための「おおなめこと」(のちの、大嘗祭)を創始なさいました。この結果、人々の生活が向上し・安定を見る事が出来たので、「トヨケカミ」とタマキネさんには尊敬名が付きました。

さて、一本を6万年に数えている「まさかき」の本数が、21本目の時代のことでした。1200万年+75200年(120075200年)の勘定になります。一本6万年であります。短命の樹もあつて、200年で枯れてしまふ樹もありました。でも、これも公称は6万年の勘定に入れての年数です。これ程の年月を経て来ても居るのに、次の指導者がまだなのです。

また、世は豊かに繁栄して人々の暮らし向きも向上しているのに、また、国の中が整って、1500人も各地のリーダーが育っているのに、アミノミチを得て人々のさまざまな困難に回答を齎してくれる、中心の「カミ」時代をリードしてゆく天皇陛下」が、未だなのです！

次代を担ってくれる「カミ」時代をリードしてゆく天皇陛下」が、無くては、未来が危うい！

嘆きの、トヨケカミの行動は、富士山への登山に移りました。富士山の頂上から見渡すのは、麓だけではありません。将来についての、物思いです。沢山の繁栄した人々が繁茂しても、「ミチ」無くしてはいつなるものか？

さらに、嘆きの思いを深められたトヨケカミは、自国のヒタカミに戻って行かれました。そこには、愛娘(まなむすめ)で、皇后陛下に上げられていたイサナミさんが、また深く悩みをおっしや

らまわ。

「ヤシキ」も「がな」(立派な、お世継ぎ子、このいじぎ、まじつても授かりたいのですー)との、切々たるお世。

トヨケカミは、模倣なまわります。

うらなひて(齋まわつてゐるまゝのまゝ)の結果は、「シキ・カシラキのイト」ヤマ」での、世継ぎ子のイサナがわりますまじつての8000回の祈願でした。(『大日本地名辞書』)

大物忌神社

今、吹浦にありて、月山神社と合祀して、鳥海山両所宮又両頭宮といふ。○新風土記云、大物忌神は、昔、鳥海山の頂上に鎮坐せるを、月山神社と共に、山下に遷坐し奉り、両所宮と称す、其後、神宮寺を置れしが、明治維新の際に、其僧侶は復飾して神職となり、明治十四年、之を鳥海山国幣中社大物忌神の口宮に定められ、春秋二季の官祭は、吹浦と蕨岡と隔年に執行ふ、月山神は、今境内撰社たり。

(月山神社)

神祇志云、飽海郡月山神社、旧在鳥海山上、後移之吹浦村大物忌神社之西、自古二社相竝、故併称兩所明神、一説、在田川郡月山、恐非、延喜式列名神大明記飽海郡。○神祇志料、月山神社、今樺引郡月山に在り(一宮巡詣記、東販探奇)、宝龜四年十月、出羽地二戸を以て神封に充て給ひ、(新抄格勅符)、貞觀元年二月、正四位上勳六等月山神に從三位を授け、十八年八月、正三位を加へ、元慶二年七月、軍を發す毎に国司をして此神に祈奉るを以て、神封二戸を増加へ、本封と合せて四戸とし、八月、勳四等を授けて神望に答へしめ、四年二月、從二位に進め奉り、仁和元年十一月、国司に勅して、殊に此神を祭らしむ、石鏡の怪あるを以てなり(三代実録)、延喜の制、名神大社に列り、祭料二千束を充給ひき。○月山は、河南田川郡の大岳なり、而も之を河北飽海郡に祭るは、彼山登陟の難きを以て、鳥海山下に社壇を並べて望拜したるに依るか。且、宝龜四年、月山神に封戸寄せられしことと、和名抄飽海郡

うか。
「ヨツキヤシロ」をお建てになつて、祈願の8000回に没頭なさいます。「カシキ(あか・しろ・き)」のシテ(樹の繊維を染めて三色に束ねたもの)を、奉(たてまつ)つての、祈願です。勿論、トヨケカミが親(みず)から冷たい水に「ミノキ(後世の禊)」をなさいましての誠心誠意を込めたるものでした。その、真心が通じたのでしょーかー！
8000回の祈願の後には、しんぞ、「アメンミヨヤ」の「まなこ(御眼玉・おんめだま)」から、「ひ(日)」と、「つ(月)」の分け下しが、起きたような映像が、トヨケカミには見えたのでした。そして、宇宙の中心の「アモトカミ」によって、子種の形の元に統合されて、そこに、「ミノツカミ(物質の全般)」が備わつてくるわけです。

こうした、トヨケカミの祈願の時に、ツタカミ、のイサナギ・イサナミさんは富士山においででした。特に、イサナギさんは、富士山の頂上にお登りになられての、大祈願をなさいます。

大きな、カガミ(金属鏡)を山頂に運ばれての祈願です。円周140cm(直径44.6cm(約))

『司(つかわ)、司(つかわ)のミ(田)を同行して、全国各地を巡(めぐ)る社会の悪癖を直し、「じやは(言葉)」の全国通用の普遍性を高め、新田開発の事業展開を進めて、また、稲作の耕作方法にウシ(牛)やウマ(馬)の畜力を導入して効率の向上を及ぼして来ました。

アマカミ(古代の天皇陛下)への正式即位の前には、女の子の「メミノ」(皇女)の誕生も得ることが出来ました。でも、女の子は、西の方角、秋の季節に譬えられています。これは、「か」の方角、左右では「みき(右)」に当たります。

未来を開いてくれるのは、やはり東の方角、春の季節です。これは、男の子です。まじつても、男の「ミ」(皇子)の誕生が待ち望まれるのです。「た」の方位、左右では「みき(左)」に

当たります』

まじつて、7代アマカミ(古代の天皇陛下)のイサナギさんは、富士山の山頂においての祈願をなさいました。

富士山の山頂には、「コノシロイケ」という小さな池があります。まじつても空池ですが、雨の多い時

期には水が湛(ただ)えらむるものじやす。

富士山、当時の呼び名では、ハラミヤマの「ノソノイケの池水で、

まず、「ひたし(左)」「の目の注ぎ洗いをなさいまし
た。

「ひたし(左)」「の目は、方位の名称から」☉(た)

のめ(左の目)「と言います。「☉(た)」「は、春

の季節、暖かな雰囲気、つまり、太陽のエネルギー
に満ち満ちた象徴です。それで、お日様(太陽)に
お祈りをなさいました。

「みき(右)」「の目の注ぎ洗いをなさいました。

「みき(右)」「の目は、方位の名称から」☉(か)

のめ(右の目)「と言います。「☉(か)」「は、秋

の季節、寒くなった雰囲気、つまり、月のエネルギー

ーの及んでくる象徴です。そこで、お月様(月)「お祈りをなさいました。

直径が今の物差しで円周140cm(ほぼ)直径44.6cm(ほぼ)もあるうかとされる大きな金属
鏡を、作ってくれた人が居ました、イシロリトメと言います。

イサナギさんは、1000日の祈願を、この大鏡のマスカガミ(10万人の平均身長を円周の長
さとした)の前で行うことになりました。日夜を分かたずと言っほどの、お力をお入れなさって
おられますご様子です。次代のアマカミとして、重責を担ってくれる「皇子」のご誕生祈願で
した。マテ(左右の事)のそれぞれ、お日様(太陽)と、お月様(月)を当てて「みたま」の
分け下されることを希(こいねが)われます。これを、古語で「アクリ」といいます。ようやく
に、「ひ(太陽)」「みたま」が、イサナギさんの「チリケ(両肩の中央)」、差し込んで来てい
るようにも感じられました。それでなのですね、お心の強へ、そして誠心誠意の祈願が1000日
にも及んでの頃は、「こは(白衣)」「も、長く着続けていたため桜色に染まって来ました。

そんなある日のことでした、イサナギさんが、月の障り(月経)の事をイサナミさんに尋ねました。
そうしますと、三日前に月の障り(月経)が終わりました。と、の事でした。身も清くて気持ちも
良いので、「ひ(太陽)」「待ちをしましょう。と、イサナミさんは言葉を続けます。イサナギさんも、
それは良い事ですね、と笑顔で答えます。

一心に心を合わせて、日の出を拜んでいますと、「ひのわ」が「フタカミ(イサナギさん・イサ
ナミさん)」「のすへ目の前に飛び来たって、輝いているように見えました。二人とも、夢のような
心地でした。

やがて、我に返ってみると、二人とも心の中がポカポカとして、ウキウキしていました。

山麓のおミヤ(宮殿)に戻りますと、オオヤマスミさんが、お酒(ささみき)を勧(すす)めてく
れました。イサナギさんは、お酒のいわれを訊ねてみました。

やがて、イサナミさんは、お酒に付きまして、次のようにお答えになりました。

『昔の事でした、わたくしが「トツキ」結婚(を致します時に、お酒の事は聞いた事がありまし
た。良く解らなかつたので、何度も聞いたのでした。ハヤタマノヲさんにも聞きました。それで、

は、イサナミさんのお父上のトヨケカミでした。8000回ものミンギ（精進潔斎の禊ぎ）は大変なことです。8000回にも及びますよ。冬の寒い時期での、寒（かん）のミンギ（禊ぎ）も、当然に含まれるわけです。熱い思いが余程の温度でトヨケカミの心を高ぶらせていた事かと、想像されます。その「ツキ カツラキの イトリヤマ（山形県の飽海郡 月山・大物忌両神社）」の、8000回のミンギ（禊ぎ）を終えられましたトヨケカミのお顔から、ミン（皇子）の誕生を聞いて、大きな安堵の息が思わず出たものでした。

わい、その後の、事を考えなくてはなりません。

トヨケカミは、わらわら、多忙な毎日を送る事となります。「**つゆ**」（イトリ・優雅で大きな鳥）を屋根に付けた御輿（みこし・テクルマ）を作らせます。「イトリのテクルマ」です。

みじかなで

③ 中世には「鳳輦（ほうれん）」「鳳凰神輿」として定着してきたのでした。もともとはラシテ時代の**つゆ**

（イトリ）です。「イトリのテクルマ」が「鳳凰神輿」などとなって近世まで定着していたものを、手塚治虫が「火の鳥」の漫画にしました。近頃では、近鉄電車が「火の鳥」のイメージの最新の特急車両を走らせはじめました。最高級感を出すものです。「イトリのテクルマ」でしたら僭上のそしりを受けるかもで、「火の鳥」なら大丈夫ですね。

アマテルカミを、勉強のために、お迎えするためです。勉強所の「あまつみや」を建てて、アマテルカミのご教育に備えます。この場所は、現在の宮城県遠田郡涌谷町の黄金山神社（こがねやまじんじや・延喜式（西暦の277年完成）『に記載あり』）と考えて良いでしょう。背後のお山は、麓岳（のだけ）と言って、産金遺跡が随所にある貴重なお山です。

アマテルカミをお迎えて、トヨケカミ自身が出向いて行かれました。東北地方の新建築の出来ました「あまつみや」から、富士山の南麓の「ハラミのミヤ」までの旅でした。富士山を仰ぐ「ハラミのミヤ」では、7代アマカミ（古代の天皇陛下）のイサナギさん・イサナミさんがお待ちでした。16歳になったアマテルカミの勉強の留学の支度を整えつつの、御輿を待つ日々でした。

わい、到着したイトリの御輿には、トヨケカミが付き添っておられ、直々のお迎えて、イサナギさん・イサナミさんも夢見心地のような感動を覚えたのでした。

トヨケカミは、アマテルカミの勉強の工程について、イサナギさん・イサナミさんに詳しく説明をします。「あまつみや」のじゅう。黄金が産出する土地である事。勉強のカリキュラムの事。などなど…。

屋根に「**つゆ**」（イトリ・優雅な大きな鳥）を付けた御輿に、青年アマテルカミはお乗りになります。また、八房（やぶら）の飾りを付けた御輿には、イサナギさん・イサナミさんがお乗りになられます。そして、もう一台の御輿にはトヨケカミがお乗りになられます。また、アマテルカミの乳母をお勤めになられた、ミチツヒメ（オチツ、乳母のことか）は、「ケタロシ」（質素な輿）に乗ってお供です。こうして、ヒタカミへの大移動となりました。

ヒタカミは、古名で「はいへ」とも言いました。それで、中心地は「けたしほ」です。「はいへは四角い事」、「けた」も同様の内容を意味します。「しほ」は粟（かなめ）のじゅうです。「けたしほのあまつみや」は、トヨケカミの当時のミヤロのひとひとであったと考えられます。現在の石巻市桃生町（ものおちょう）の日高見神社の所を、候補地の筆頭に挙げて置きたいと思えます。日高見神社は『延喜式（西暦の277年完成）』に記載されています。付近には、産金遺跡が点在しています。トヨケカミは、提案しました。

『いのわかみや ちよ、だから、「ヒカヒト」やまじ、